東日本大震災　復旧・復興のとりくみ

みやぎ生協

● シンポジウム「東日本大震災からの『復興』と“よりよい地域づくり”のために」

みやぎ生協では、東日本大震災発災後、被災された方々に寄り添い、普段の生活に戻れるようふれあい喫茶（サロン活動）の活動を中心に、コミュニティーづくりや孤立化防止に取り組んできました。

震災から１年半を経過したこの時期に、これまでのボランティア活動の振り返りと、今後の課題を考えるためのシンポジウムを、9 月 7 日（金）アエルの多目的ホールで開催しました。

当日は、120 人ものメンバーが、同志社大学の上野谷加代子先生の基調講演の他、山口一史さん（コープこうべ理事）、佐々木伸さん（仙台市青葉区まちづくり推進課長）、高橋朋子さん（みやぎ生協理事）をパネリストに迎えてのパネルディスカッションに聞き入りました。

参加者からは、「いつも同じ顔のボランティアで悩んでいたが、それでもいいんだ。」という感想や、「たすけ上手たすけられ上手」「協同（協働）・連携」「よかったさがし」「阪神淡路の失敗に学び、ゆっくり復興が大切」などのキーワードが、今後の活動の参考になったとの声が寄せられました。

講師の上野谷加代子さん

（生活文化部　須藤敏子）

生協あいコープみやぎ

● 石巻市渡波の地域サロン「よってがいん」に、寄ってがいん！

あいコープみやぎは、被災地の組合員とともに、暮らしと地域コミュニティーの再生に貢献できる活動を進めています。

石巻市渡波地区で、地域の誰もが安心して過ごせるようにと、地域サロン「よってがいん」が、今年 6 月にオープンしました。

あいコープみやぎでは、前身である「ちょこらい」に、昨年秋から職員が毎週食材の提供などの支援を継続してきました。また「よってがいん」立ち上げに当たっては、新居へ備品の提供などを行いました。地域のお年寄りや障害者など利用者の方々にとっては「よってがいん」が心の拠り所であり、無くてはならない居場所になっています。

しかし石巻でのボランティア減少による人材難や、資金の確保など課題は山積しています。人材難により開所が毎日から週２回ほどになり、利用者とお昼を作り食べる活動もしていましたが余裕がなくなっています。

この「よってがいん」のスタッフ・利用者には、あいコープの組合員がいます。復興まで長い道程ですが、人と人が繋がって安心して暮らしていけるこの場を、細く長く支援していきたいと思います。私たちのできることとして、食材の提供と話し相手や家事支援があります。

あいコープ組合員の参加で、支援の輪を広げていきたいと思っています。（理事　鈴木智子）

東日本大震災　復旧・復興のとりくみ

宮城労働者共済生協

●　「仙台放送まつり 2012」に「ぼうさいカフェみやぎ」のブースを出展！

全労済宮城県本部は、9月22日（土）・23日（日）に開催した「仙台放送まつり 2012」に、東日本大震災に学ぶ「住まいと暮らしの防災保障点検運動」の一環として、「ぼうさいカフェみやぎ」を出展しました。

防災をテーマとしたブースは、大河原消防署・東北福祉大学のご協力のもと、日ごろあまり触れる機会のない消火器の模擬訓練や、防災用具をまとめて観覧でき、減災に役立つ「もりぞう」を展示させていただきました。小さなお子さま連れのご家族の皆さまをはじめ、大人も子どもも楽しみながら、熱心に体験されていました。ブースにお越しいただきました皆さまに大変ご好評をいただきました。

初日は天候にも恵まれましたが、２日目は初日と打って変わり終日の雨模様。足元の悪い中でしたが、ご来場の皆さま、および今回ご協力をいただきました各方面の皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

（専務理事　阿部田克美）

ブースの様子

みやぎ仙南農協

●　産直めぐみ野米の 2012 年産新米発売！

9月29日（土）県内で2012年宮城県産新米の販売が一斉にスタートしました。

当 JA では､みやぎ生協幸町店で開催された発売セレモニーに、角田・丸森地区産直めぐみ野米の生産者代表が参加し、新米のおにぎりを振舞いながら今年の作柄が良かったことや、安全性、そしておいしさの実感等々を来店するメンバーさんにお伝えしました。みやぎ生協ではすでに新米ギフトの受注件数が前年の30％増、一昨年並みに回復し、上々の滑り出しとなっています。

生産者も参加した新米発売セレモニー

4 月からセシウム基準値が100ベクレル/kgに引き下げられ、その対策として福島県事例の分析から肥料三要素のひとつである土壌中のカリウムを、20 ㎎/100ｇ以上確保すれば、稲体にセシウムは吸収されないことがはっきりとしてきました。管内の農業関係機関が一体となって「ふるさとの稲作を守るんだ」という共通の思いのもと、行政の財政支援や資材確保、供給体制整備等を進め、管内の全水稲作付水田に塩化カリを散布することができました。

特に、産消直結めぐみ野米の産地である角田・丸森地区では、宮城県が行う約 1,000 点の高い密度でのゲルマニウム半導体検出器検査がおおむね終了となりますが、今までのところすべてが不検出となっています。

（営農経済部部長　三戸部文夫）

東日本大震災　復旧・復興のとりくみ

大学生協東北事業連合

● 南三陸町で震災復興ボランティア活動

東北事業連合では、9 月 24 日（月）～25 日（火）の 2 日間にわたり、宮城県南三陸町の震災復興ボランティアを行いました。このとりくみは、ボランティア活動に関心はありながら、一歩踏み出せない大学生に向けて企画したものです。

当日は運営スタッフも含め 22 人で、ボランティア活動を行ってきました。東北 6 県の大学の他に、東京大学からも参加がありました。

ボランティアセンターの指導の下、草刈りと瓦礫撤去の活動を行いました。活動後は、南三陸町被災地（防災庁舎等）の視察を行い、宿泊先の旅館のご主人から震災当時のお話を伺いました。

参加した学生達からは、「もっとたくさんの学生にこの現状を伝えないといけない。」「まだ復興は始まっていないと感じた。」と、感想が寄せられています。

今後も東北事業連合では、被災地の現状を多くの学生たちに伝えながら、学生ボランティア活動支援を進めていく予定です。

瓦礫の撤去作業の様子

振り返りミーティングの様子

（常務理事　峰田優一）

食のみやぎ復興ネットワーク

● 活動２年目の仙台白菜プロジェクト～沿岸部へ作付け拡大～

大正から昭和の初期にかけて宮城で生産された仙台白菜を復活させ、震災復興のシンボルとして広く全国に発信普及していく「仙台白菜プロジェクト」が活動中です。塩害に強い白菜の栽培でいち早く農家を経済的に支え、食べ方の普及を通じて仙台伝統メニューを掘り起こしています。この活動にはＪＡ全農宮城県本部、みやぎ生協、食品メーカー、市場関係者、明成高校、宮農高校など 20 団体が参加しています。昨年はさまざまなイベントや食品メーカーによるメニュー提案、地元紙の広告や各種イベントを通じて仙台白菜をアピールしました。

仙台白菜の定植作業に参加された皆さん
（岩沼市寺島にて）

活動２年目の今年は、津波被害の大きかった名取・岩沼地域で作付けを拡大しました。

９月８日（土）津波で大きな被害を受けた岩沼市沿岸部で、ＪＡ・みやぎ生協・明成高校・宮農高校・仙台市内の小学校などから 110 人が参加して、仙台白菜の定植作業が行われました。当日定植された白菜は、11 月の中旬には収穫される予定です。

（みやぎ生協店舗商品部・食のみやぎ復興ネットワーク事務局　藤田孝）